

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十四年十一月十五日
第三種郵便物認可
発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三六五号）

次

目

63.9.4 ④

遠く宿縁を慶ぶ……………花田正夫……………(21)	念仏詩抄……………木村無相……………(18)	自照日誌抄(14)……………西元宗助……………(16)	御一代記聞書抄(続・四)……………井上善右エ門……………(13)	お慈悲とお浄土……………安波勲八……………(11)	浄土問答……………福島政雄……………(5)	涅槃の極果・蘭林の遊戯……………近角常観……………(1)
---------------------------	------------------------	-----------------------------	----------------------------------	---------------------------	-----------------------	------------------------------

④ 遠く宿縁を慶ぶ
伯父上のことども

慈

光

第三十一卷

第十一号

涅槃の極果・蘭林の遊戲

近 角 常 觀

「浄土真宗の勸化は、平生業成（へいぜいごうじょう）の信の一念にて往生は定まるものなり。これ皆弥陀他力本願の強縁にもようさるることと心得べきなり」とある善知識の御教訓は、わが父が最後の際に至るまでの信仰の鑑であつた。そして私に身をもつてその味をしらして下さつた。特に平生業成の意味がわかつた。

全体父は持病のため深い昏睡におちいられることが多かつたゆえ、人生上のことは大抵皆違つておつたが、その間において、信心上のことだけは益々確實であつた。日暮れから夜に入るにしたがつて、星の光の明らかになつてくるように、信仰の有様はすこしも平生と異なることはないけれども、身体も不自由になり、口にはうわごとばかりを言い、精神上も間違いがちになるにしたがつて、信仰の間違ひのないことがひとときよく目立つてきた。最も驚いたのは、身体に随分ひどい苦痛があつたにもかかわらず、身体之苦痛と、心の安慰とが別々になつておつた。うわごとと読経

つて氣をとり直す必要はない。平生業成の信は、上一生の間継続して、自分ではからわないのに、所謂自然の強縁にひかれて人生の日暮れが来ると同時に、滅度涅槃の星が輝いてくるのである。

信心ある人の臨終を見るときは、滅度とか寂滅とかいえる言葉はいかにも適切である。されどその滅なるものは、絶滅する意味でなくて、かえつて永久自由の境に入り、所謂諸根悦豫（しょこんえつよ）の樂しき域に遊ぶのであることは、この度親しく實際においていかにもよくわかつた。実にこれ「常樂の妙境」であつて、仏陀が涅槃に入りたまふとき、悲しめる弟子方に対して「如来は常住にして変易（へんやく）あることなし」と教えたまいたる靈域が、歴々として見える心地がした。

「必ず、滅度にいたれば、即ちこれ常樂なり、常樂はこれ畢竟寂滅なり、寂滅は即ちこれ無上涅槃なり。無上涅槃は即ちこれ無為法身なり。無為法身は即ちこれ実相なり。実相は即ちこれ法性なり。法性は即ちこれ真如なり。真如は即ちこれ一如なり。然れば、弥陀如来は如より来生して報・応・化種々の身を示現したまふ」と

という繰返しのお言葉が、一々生きて味わうことが出来るようになった。『浄土論』に描かれてある浄土莊嚴の有様はこのたびこそ目に見るようになつたことが出来るよう

とは、出てくるところが別のような氣持がした。

ややもすれば、平生業成とは平素に手廻しをして置くことで、平素に役済みであるから、死際には信心が消えてしまつてもよいのであると誤解しておる者がある。こんな信心ならば仕入物のような信心じや。金剛堅固の白道は、いかにも人生の水火のためにおおわれることはあつても、心の底には終始かわりなく、未まで通つて、遂に西の岸まで達しておるのである。一分一分病苦は増す、一息一息体力は衰える。しかし信心のことは確然としたままで、少しも変らず、遂に寂靜無為の境に入るのである。

この父の様子をとおして「涅槃の城（みやこ）には信を以て能入とする」という教が、初めて身に浸みていただけた。また「煩惱成就の凡夫、生死罪独の群萌、往相廻向の心行を得れば、すなわちの時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず滅度にいたる」とあるなど、らかなる連続がよく味わえた。臨終という時に、別段きわだ

になつた。

正覚阿弥陀法王の善き力によつて住持せられた寂靜無為の浄土の大なる御親の下に、如来淨華衆たる眷屬莊嚴の方々が、正覚の華より化生し給う様子が見える心地がする。わが父も今やこの莊嚴の仲間入りをして、善友相見て極みなく喜んでい給うかと思うと、実に心の中が淋しい中にも非常な満足である。その浄土に生れらるるや、所謂「無生の生」で、目が醒めてみれば、昔ながらの悟りの限りなき世界であつたことを、味うておらるることであらう。ことに「五功德門」の譬論などは、たしかに浄土、穢土の間を出入りした経験のある人でなければ、とても説くことの出来ぬ境であることがわかつた。

私は二十年来、他郷に遊んでおりましたが、今になつては、毎年必ず国に帰省した時の感じを想い起されます。

汽車が生国の境に入る。山水は皆旧知己である。行き過ぎる村々まで幼少の時に遊んだ歴史中のものである。かく一歩一歩漸次に故郷に近づく、はるかにわが村が見える。わが家の松が見える。次に屋根が見える。「近門」の味はこじや。人生にて法を聞いて一歩一歩浄土に近づくのもかくの如くである。かく近づいてくれば、田にある農夫、道に遊ぶ子供まで、帰つて来られたと迎いに来る。何時の間にやら私は故郷の人たる「大会衆門」正定聚の仲間入

りをする。こうなればもう帰ったも同様。足の進むにしたがって自然にわが家の門まで来る。

さていよいよわが家の園を跨いで、待ちかねたまえる父母の膝下に「唯今帰って参りました」と頭を下げ、頭をあげると兄弟は側に居り、旧知己も集っている。一家団欒やれやれと心を安らかにし、気をおちつけて、いつも仏祖の冥助に感泣したことがあった。

今やわが父もその如く蓮華藏世界に入って、真如法性の身をさとりて待ちかね給える本師法王にまみえ、眷属莊嚴の中に加わって、修行安心の宅に安住し給える「宅門」の味は、二十年来、わが度々この生においてわが家に帰省した味と同様と思えば、たしかに自分も半分だけは父上に伴ってその境にある心持がする。

さてそれから座敷へ通る。母上の用意されたご馳走、誰某がくれた菓物、帰るまでと貯えて下さった珍物など、旅の話と故郷の話と、語合って味わう有様は、これこそたしかに修行所居の屋寓に入って仏法の味を愛樂し、禅三昧を食として法味樂に満足する「屋門」の有様である。かく満腹すれば、庭木や花園の間でも散歩でもしようかと父子あいたずさえ、母も弟も共に散歩する有様こそ「蘭林遊戯地門」の真趣味である。

蘭林遊戯地門というのは、如何にも適切な譬喩である。論

菩薩が、「ほろほろと鳴く山鳥の声きけば、父かとぞ思う母かとぞ思う」と讃えられたが、我々一生の間に生れかわり死にかわり、仏が私を救い給うことの深きことは、到底測るべからざることである。亡くなられた親が私を導かんとして、樂しき浄土に安んぜずして、再び穢国に還来し給うことを思えば、親の慈悲の極みないのに感泣すると同時に、もともと如来の御親がわが親を出迎え給いしのみならず、蘭林遊戯地門の衆生済度の徳まで授けて下された周到なる根本的大慈悲に渴仰する次第である。

ここにいたって、親鸞聖人がこの蘭林遊戯地門に重きをおき給いて、仏陀が我々の上に下したまう救済の一半であるとお示し下さったのは、なかなか深い味あることである『教行信証』開巻に「謹んで浄土真宗を案するに二種の廻向あり。一には往相、二には還相なり。往相の廻向について真実の教行信証あり」と示されたのをみてわかる。私のような、従来還相廻向を左程重大なことと思わず、有体に告白すれば、真実証文類の付物ぐらゐに考えておったが、これは大きな誤りであった。聖人は御晩年になるにしたがつて、この辺に重きをおかれたと見えて、特に『入出二門偈』を作られて、浄土に入ることと、穢土に出てくることを対等にならべられて、いずれも仏陀の廻向なりと喜ばれた。私の如き従来前半世においては、父が浄土に往生せ

に曰く「大慈悲をもつて一切苦惱の衆生を觀察して、応化の身を示し、生死の園、煩惱の林の中に廻入して、神通をもつて遊戯して教化地にいたる、本願力の廻向をもつての故に、これを出第五門と名づく」と。これは誰も何気なく読む文であるが、実に深き趣きのある教えである。「応化身を示現することは、あだかも法華經の普門品にある三十三身の如し」と曇鸞大師は註釈せられた。又願文には「普賢の徳を修習せん」と誓つてある。普賢行願讃という經文の意義を味わうと、あたかも弥陀の願意と同様である。そもそも『普賢行願讃』は『文殊師利發願經』と同本異訳にしてその意味は次のようである。

曰く、身口意の三業を情淨にして十方の諸仏如来を供養し、三世の菩薩と共にあらゆる衆生海を済度し、殊に文殊師利は智慧をもつて普賢の行願とあいともないて、多くの仏子を誘ひ、命終の時、無量壽仏の宮に生じて、親しく阿弥陀仏にまみえ奉らむとの意味である。

かく考えて来れば、諸經中にある諸仏・菩薩は、我々を引接するための方便である。してみれば、我々人生なるものは、如何なる所に、如何なる仏の示現があるやらわからぬ次第である。親鸞聖人が聖徳太子の上に観音菩薩の慈悲を仰ぎ、法然上人をもつて勢去菩薩の智慧の化現と御覽になったことは、たしかにこれの事実上の証明である。行基

られる始終、即ち平生業成の信心から遂に涅槃の妙果に達せられる最後まで、信仰の鑑であつたが、今ではもはや親しみ接することが出来ぬゆゑに、唯々穢土に還来して普賢の徳を修し給うことを、後半生の理想とするよりほかはない。和讃に

観音勢至もろともに 慈光世界を照耀し

有縁を度してしばらくも 休息あることなかりけり

安樂浄土にいたるひと 五独惡世にかえりては

釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきわもなし

とあるのも、今はひとごとならず、よく我が身の上に蒙る慈光なり、と喜びに堪えぬ次第である。

聖人が「我二菩薩の引導に順じて如来の本願を弘むるにあり」とのたまえる感謝は、よくよく身にこたえて感涙に堪えぬ。幸いに宿縁深くして、かく行信に遇い奉りたる以上は、もうこの世の望みは、この大御親の慈悲を一人にても伝える常行大悲の徳に従うて生活するより外はない。かく生活すれば、我一人おらば二人、二人おらば三人と、必ずわが父も影の如くに我々の身に添ひ給うことは疑われぬ次第である。されどこの世における間は思ふ存分にお慈悲を伝えることは仲々むづかしい。往生成仏の暁にわが親と手を執りて親しくこの煩惱界に遊戯させて頂けることを思い仏意の無窮を仰歎し奉るばかりである。

浄土問答

福島政雄

A、仏のお浄土というものはどんな結構なところだろう。私も老人になった。往生浄土ということも今から数年の後には必至であろう。どうか静かに落ついて往生したいものだ。お念仏申してしずかに……

B、お爺さん、何を世迷い言を云っているんです。仏のお浄土などというものがあるのですか。どこにあるんです。そんな空想の世迷い言なんか止めたらどうです。

A、お前はそこにいたのか。世迷い言を止めろと云つても、そんなに簡単に止められるような世迷い言ではないよ。これにはしっかりした根源があるよ。お前はまだ若くて元氣潑刺としているから、自分の元氣をたのんで、老人の世迷い言などと悪口をいうが、お前が老年まで生きていたら、ああ、あれはお爺さんの世迷い言ではなかったと悟る時が来るだろうよ。

B、それでもお浄土は十万億土の西方にあるなどとは世迷い言ではありませんか。地球を西へ西へと行って御覧な

さい。また出発したところへ帰って来るではありませんか。それくらいのことはお爺さんだって知ってるでしょう。それなのに、これから西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽というようなお経を真面目腐って読んでいるではありませんか。馬鹿々々しくて話になりませんよ。

A、お前は浅薄なことを考えているナ。西というのは、地理的に西に行けば極楽があるなどという意味ではない。もし深い象徴的な意味だ。象徴と云つてもお前にはお前にならないだろう。有限をもって無限を象徴し、有形をもって無形を象徴するところだ。浄土は十万億土の西にあると同時に、お前の近くにお前に接してあるのだ。絶対の世界であつて、この世と相對立しているような世界ではないのだ。ただ吾々凡夫に心を静めて心を定めさせるために相對的に方角を定めて西方と言われているのだ。

B、お爺さんはまたむつかしいことを言いますナ。象徴

ということと私にだってわからんこととは思ふけれど、有限をもって無限を象徴しなどと云われるとわからなくなる。もう少しわかり易く言つて下さい。

A、それではナ。お前だって毎日仏壇を形式ばかりは拝んでいるようだが、お名号を何と思つているか。お名号は象徴だよ。廣大無辺な仏陀をあらわす象徴だよ。即ち仏陀を感じるたよりになるしるしだよ。又お位牌だつてそうだ。お先祖の深く遠い精神を感じるしるしなのだよ。それでお浄土だつて広大な世界だけれども、ただ廣大無辺と言つて見ても、吾々には何の感じもおこらないので、お経では色々の象徴でもつてお浄土を感じしめるように説いてあるのだ。

B、そう言われるれば少しわかるようですけれども、金銀珊瑚だ光明だ音楽だと説かれても、私等のように今日の科学精神で育てられているものには、ちっとも有難いと思えませんよ。何だ、お浄土というのはお伽噺にあるお菓子や玩具の世界のようじゃないかというような感じを起すのです。お爺さんのような有難い心持にはなれませんよ。それでお爺さんを馬鹿にしたくなるのです。

A、お前は今日の科学を信仰しているか。なるほど今日の科学はなかなか進んで、電子だの原子だの、中間子だの相対性原理だのと言つて、その實際上の応用も大したもの

だが、併し科学はあくまでも冷たい世界を冷たく見るものだ。ところが人間はそれだけではどうしても満足出来ないところがあるのだ。お前だつてそうだろう。いくらお浄土の説き方を悪口しても、そのようなお浄土は仏陀の温かいお慈悲の心から出ていることがわかったら、そんな悪口は云わなくなるだろう。お前だつて冷たい世界に冷たく死んで行きたくはないだろう。科学は人間を物として取扱うものだ。

B、それは私だつて温かい心を求めてはいるのです。併し仏陀のお慈悲というようなことはわからないのです。人間の温かい心というならばわかります、それは愛です。親子の愛や兄弟や男女夫婦の愛ということならばわかります。これは温かい心とおもいます。私も愛を求めてはいます。

A、そうだろう。併し人間の愛というものは、どれだけあてになるものか、お前はまだ若いから夢のように永遠の愛というようなことを考えているだろうが、人間の愛というものがそのまま永遠の愛であることは決してない。いや、人間の愛ほどあてにならないものはないのだ。

B、そうでしょうか。西洋の詩人などは永遠の愛を歌っているではありませんか。

A、それは詩人が人生を美化してうたっているのに過ぎない。人間の相對愛というものは、常に變転しているもの

で、殊に愛憎と云つて愛は憎しみに裏づけられている。可愛さあまつて憎さが百倍ということもある。とにかく愛にならぬものだ。

B、併し親子の愛は特別のように思われるが、どうでしょう。

A、親子の愛を特別だと感じているならば、まだお前は話せる。併し親子の愛といえども人間の愛である限りは絶対のものではない。色々の条件に左右されるものだ。

B、それならば、お爺さんは、絶対に温かい心というのは此の人生に無いと言われるのですか。

A、いや、人間の愛そのものとしては絶対のものではないが、この人生には人間以上の絶対に温かい心が流れていることを感ずるのだ。それは絶対のまことというべきもので、この人生を温かくるおす大生命というか、久遠の真実生命というか、人生の愛とか誠とかいうものの根源をうおしている、生きたいのちである。親子の愛というものはこの根元のいのちに最も触れ易いものであるから、吾々は親子の愛が特別のもののように感ずるのだ。

B、その温かい心の根源というものがお経に説かれてあるのですか。お爺さんはどうしてそれを感ずるようになったのですか。

A、お経は大無量寿経だ。このお経には四十八願という

うにありますが、併し私にはなかなか、その生きた誠というものが感ぜられないのです。

A、それは、お前が自分の姿に目がさめていないし、又この人生の無常ということを痛切に体験していないからわからないのだ。親を亡くし、子を亡くし、兄弟を亡くし、友人を亡くし、そして自分が如何にもみじめな欲のかたまりであるというようなことがわかつて来れば、それと同時にその自分をどこまでも見棄てず、嘔みたまう久遠のまことの生命が感ぜられて来る。そこに自然とお念仏も申されるようになり、お浄土をも感ずるようになるのだ。

B、もうよほど以前のことかと思いますが、如来及び浄土の観念ということが、その道の人々の問題となつたと聞いているが、如来も浄土も吾々の観念であると云うのでしょうか。観念ならば想像が生み出したものとも言われると思いますが、どうですか。

A、如来及び浄土の観念というのが吾々の主観による観念だというのなら、そんな如来や浄土は吾々の主観でこしらえたものに過ぎないことになって、いつでも吹き飛んでしまふ。吾々人間が想像で作りに出したものならば、心が変つて来れば消え去るものだ。

B、どうもわからない。それならばお爺さんが浄土を信ずるということについて、確証なり、根拠なりはどこにあ

ことが説かれてある。それは法蔵菩薩という菩薩が仏国土の建現のために立てられた願であつて、此の願が成就の時に法蔵菩薩は阿弥陀如来となられるのだ。同時に浄土も建立されるのだ。そして四十八願の中心になるのが久遠のまことの生命であつて、まごころと信仰と永遠の生命の希望とを衆生に与え、如何なる苦毒にも耐え忍んで、真実の国土を衆生のために開きたいという願である。その真実の国土は即ち浄土であつて、仏の慈悲から建立せられる国土であるのだ。

B、その法蔵菩薩とか、阿弥陀如来とかいうのは神話のようなものじゃないでしょうか。歴史上の人物でもないようです。

A、歴史でもなければ、神話伝説でもない。これは吾々が心魂に感ずる生命の事実の世界であり、釈尊が大無量寿経において吾々に開いて下された世界である。久遠のまことの生命というものが概念沙汰ではなくて、吾々が直接、吾々のいのちの奥深く感ずる世界である。生きた誠が吾々にひびいて来るのである。釈尊がこの事について吾々の目をさまして下されるのであるが、吾々を直接導いて下さるのは親鸞聖人である。

B、お爺さんはなかなか真剣になって言つて下さるので法蔵菩薩のことが、歴史や神話伝説ではないとわかつたよ

るのですか。

A、それはこの人生の深い体験と釈尊の教とがピッタリと合うところにあるのだ。殊に浄土という感じは自分の大切な親や子や兄弟などを亡くして悲痛のどん底の心持で釈尊の浄土教に接する時に確かに感ぜられるのだ。それは理屈ではない、直接の感じであつて絶対なものだ。お前などにはまだわからないだろうけれども、これから後に色々な目に逢うだろうから、その時に科学ですべての解決がいくがどうか。無限のまことのいのちという釈尊の浄土教でなければ落着けないことを感ずる時も来るだろう。老人の世迷い言などと軽蔑せず真面目になつて聞いて置くがよい。

B、いや、悪口を言つてすみませんでした。併しその浄土と此の吾々の世界との関係はどんなになるでしょう。浄土は絶対の世界だ、此の世と対立するものではないと言われましたが、そうすれば此の世は浄土に摂め容れられていることになりはしませんか。しかも此の世は苦悩の穢土であるとお爺さんは感じていられるらしいが、そうするとそこに矛盾がありはしませんか。浄土に摂め容れられているならば穢土ではないということになりませんか。

A、理屈を言えはそんなことになる。併し浄土教は理屈を云う教ではないのだ。人生の現実が苦悩である。そしてこの人生は無常流転の世界である。無常流転の苦悩にぶつ

かつて、何とも動きがとれなくなる時、吾々はただまことのいのちを求めるようになるのだ。まことのいのちとは、吾々が自分の食欲、瞋恚、愚痴などの煩惱にせめられ、又人生の無常を悲しみ苦しんでいる時、その吾々を底の底まで見とおして理解し、無限のあわれみを以て吾々を久遠真実のいのちの中に摂取したまい、真実の世界、即ち浄土に往生させて下さるのが仏陀であるから、浄土というものは、仏陀の慈悲を離れて存在するものではなく、吾々が仏陀の慈悲を感じるところ、浄土は必ず吾々に開かれる。

B、その浄土が吾々に開かれるというところがわからないのです。穢土が浄土になるのですか。

A、仏陀の智慧と慈悲とを光明にたとえてある。いや、たとえてあるというよりも、智慧と慈悲とは吾々のいのちの底に染みとおる心の光とも云うべきものだ。吾々は苦悩のどん底においてこの光を感じるのだ。それは大心光である。この大心光が浄土に照り満ちて、その照り返しの光がこの穢土の吾々に触れる、すると吾々は穢土にありながら浄土を感じる。いや、穢土が浄土に転ぜられるというような趣をほのかに感ずるようになる。少し相対的な表現であるが、穢土と浄土とは云わば炭と火のようなもので、吾々の貪瞋痴の煩惱の炭が転ぜられて、浄土の清浄、歓喜、智慧の光となるのだが、それはすべて仏がこれを為さしめ給

土ということが容易に出来るものではないと思われませんが如何ですか。

A、地獄は一定すみかぞかしというのは、聖人の御自身の姿に目ざめられたお言葉だ。その地獄一定の身であることを徹見してなお更に見棄てることが出来ないという如来のお慈悲を聖人は体験して居られるのだ。甘んじて地獄におちて行かれる、その地獄の瞋恚の炎を歓喜の光明に転ぜしめられるのが、仏陀、即ち如来の力だ。それは信仰の上に現われてくる不可思議の事実だ。理屈ではわからないが、吾々が直接に体験することだ。

B、いや、これは大変なことを聞かされました。地獄は地獄、浄土は浄土と全く別の世界と想っていたのに、地獄が浄土に転ずるといふのはこれは初耳です。それでは餓鬼の世界は転じて清浄光明の世界となるのですか。これは愉快だ、仏教は大したものですね。以後悪口は慎みますから、お爺さんが此世に生きて居られる間に、この私の心が開けますように、そして浄土がわかりますように、どうぞ指導して下さい。

A、指導などということは出来ない。すべては因縁だ。お前がお慈悲や浄土に目がさめるか否かは全く因縁の問題でこの自分がどうしてやることも出来ない。併し、自分とお前とが浄土ということをごんごんに語り合ったことが何か

うのである。吾々から云えば、大心光に融かされるようなものである。吾々の力ではない、仏のまことのいのちの力である。

B、いよいよわからなくなりましたが、併し人生は誠心を以て中心とするということは私にもわかります。誠心を以てすれば宜いのじゃありませんか。

A、その誠心というものが、吾々が自分の誠心と思っているものではあてにならない。吾々は微塵の誠心もないというのが正直な話だ。ところが大量無量無量無量には「至心に廻向したまえり」とあって、仏陀が誠心を以て吾々に一切の根源のまことのいのちを賜わるといふのだ。

吾々が自分の誠心だなどと思っているものは末通らぬ誠であって、五分五分根性の当てにならぬ誠である。真実に徹底する誠心は如来の至心である。絶対一如の世界から常住不斷に不実な吾々にそそがる至誠心であり、まことのいのちである。そのまことのいのちに信頼して吾々は浄土に往生するのである。穢土が転じて浄土になると言ったが、それは如来の誠によって融かされて転ぜられるのだ。

B、どうもわかったような、わからないような気持です。それなら地獄とか餓鬼とかいうものはどうです。私は地獄や餓鬼の世界が別にあるとは思いませんが、親鸞聖人が地獄は一定すみかぞかしなどと言って居られるから、往生浄

の因縁になるかも知れない。やれやれ有難いことだ。若いものがどうやらこの老人の言うことに耳を傾けるようになったわい。これもひとえに仏様の御力だ。絶対他力の世界に目をさまされた自分は何という果報者だろう。お釈迦さま、阿弥陀如来さま、ありがとうございます、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

昭和二十八年秋

七里和上言行録

和上曰く。必ず助けるの御約束のお言葉をめあてにしたが信心じや。故にお浄土へ向って、参れるか参れぬかを案じていては千年を経つても安心は出来ない。参れるか参れぬかよりも、御助け下さるか下さらぬかを思え。そうすると何時思つて見ても、如来様の御約束は、そのまま助くるの仰せの外はない。故に何時思つても如来様のお助けの間違わぬことが知らされる。如来様の仰せをのけて、浄土に参れるか参れぬかを思つたのでは安心はできぬ。それは向き処を違えているのじや。

安心は浄土へ向いて参れるに間違いないと安心するのではない、如来様のお呼び声に安心するのである。御約束に安心するのである。

お慈悲とお浄土

医師 安 波 勲 八

大正十三年秋、私の実妹が突然病氣になつて僅か四十日ばかりで此の世を去つた。その時、母と一番上の姉が、どうせ無い命なら生きているうちに仏の御慈悲に気づかせてやりたい、私に仏のお慈悲を妹に説けと云われた。その時私は行き詰つた。その時私にお浄土がはつきりしていたら、又仏の慈悲で死んだら必ずお浄土に参れると信じられていたら妹に話せるが、私に自信がなく、話す言葉もなかった。

その事を座談会で申上げたたら、其時の和才大尉のお言葉が私によくはいった。

「私は極楽があるかないかということは学問としては知らぬが、信仰の上からは確かがあると断言出来る」

「私にはそれが出来ないで話されぬのです」

「この私をいつでも引受けて下さる人のあるということ、極楽のあるという事ではないですか。何もお前は到底助からぬとか、なんとか云うて病人を驚かせぬでもよい。何ともしようのない者を見捨てぬ——何時でも、如何なる

話されたそうであつた。東陽和上様も、それはよかつたと大変喜んで下さつて、「お慈悲を通して極楽を信ずる、それが順序ですなあ」と申された。

○

お慈悲とお浄土の問題は、一昨年の秋、妹の死に際して私に解決されたが、此度私が死の宣告を受けて生死巖頭に立つても、私には死んだらお浄土に参られるという喜びは少しもない。私の信友はそれでひよつと間違いがあつてはと心配して下さつた。そこで色々と注意して下さつた。

本年三月二十八日、最後の東陽和上への水崎参りの時、雲山和上にお会い出来た。その節短時間であつたが、私に浄土の觀念の薄いのを見てとつて次の質問をうけた。

「この何ともしやみょうのない私をいつまでもお相手下さるお慈悲を喜ぶのと、そのお慈悲で死んだらお浄土に参られる事を喜ぶのと、二通りあるが、君はどちらだ」

「私の今の喜びは、この何とも仕様のない者をお見捨てないお慈悲を喜ぶばかりとお答えせねばならぬ。勿論仏語に虚妄なしで死後お浄土に参れることに少しも疑いもない、又真実は必ず顕現する、私をお見捨てないお慈悲の顕現が、即ち莊嚴仏国土である。お浄土の存在には少しも疑いはないが、私にはそれを喜ぶ心は少しもない。私は今死の宣告を受けて大きな逆境にあるが、それなのに平常の生活と変

ことがあつても——というお慈悲のまします事を話したらよいではないですか」と云われた時に、私にお浄土という意識が始めてはつきりとなつた、成程そうだ！

極楽が何処にある、どんな処だという事は学問上のことだ。理屈のことだ。この何ともしやみょうのない私をいつでも救つて下さる仏の存在するということが、この世では安心立命の生活の出来ることであり、この世を去れば極楽の世界だという事だ。お慈悲の上からは此の世と極楽との区別はない。唯人間の身体をして居る間が娑婆で、人間の身体を失うた時が極楽だ、生きようが死なうが、地獄に落ちようが、極楽に居ようが、この私をいつでもお相手して下さるお慈悲のましますことに間違いはない。

私は妹の生死問題によつて私の生死問題が計らずも解決されたことを喜んだ。次の座談会でその事を聞いて下さつて和才さんは大変喜ばれ、あとで「安波が私の話したままを了解してくれた、こんな嬉しいことはない」と或る人に

らず、つまらぬ事で妻に腹立たせ、欲を張つて相変らず浅ましい生活をしている。これを呆れずお相手下さるお慈悲が誠に有難い、それによつて今強く生かされておる」とお答えしたら、和上は

「實際今の御境遇ではそうでしょうなあ！」と強くうなづかれて大変喜んで下さつた。

和才さんも麻生介先生も私の心持をよく聞いて下さつてお浄土に対する疑問は氷解された。

二月下旬、私の重病を初めて聞いて、和才少佐は久留米から訪ねて下さり、信仰上の間違いがなければよいが、療病の状態についても、家族の身の上についても種々注意して下さつた。帰つてからも幾度も筆を執つてお浄土の存在をしきりに教えて下さつた。私は誠に嬉しかった。他の人は私の死の宣告をうけても安心して従前通り診療に従事しているのを見て、信仰は偉大である、お慈悲は有難いと、私の善い方のみを見て喜んでくれるが、和才さんはひよつと間違がなければよいがと心配して下さる、誠に有難い。

四月には再度見舞うて下され、別府の求道会同人と語らい私と家族のため盛大な慰安送別会を催して下さつた。そこで私は、真実は必ず顕現することを知らされ、お慈悲は必ず仏国土として顕現することも教えられた。

——(死の宣告をうけて)——

御一代記聞書抄（続・四）

井上善右エ門

信心治定の人は誰れによらず先づ見ればすなはちたふとくなり候。是れ其の人のたふときに非ず。仏智を得らるるが故なれば、弥陀仏智の有難き程を存すべき事なり。

（二一〇条）

まず「信心治定の人は」とありますが、信心とは如来の悲心の全徳を領受する身となることであり、仏心がこの煩惱具足の淤泥の水にさながら来り宿って下さることであります。おうけなくも如来の真実が、我れならぬ我れになつて下さる事実が信に外なりません。

信の原語「フラスターダ」(Falsch) 澄浄と直訳が中国に伝わったとき、これを的確に表わす漢語がありません。中国にはなかった宗教体験をそのまま表わす言葉がないのは当然です。それで結局、漢字の信を以て当てたわけです。信とは本来「まこと」の義であり、それが同時に「たがわず」の意をもちます。たがわずとは一致を意味します。一致せ

ぬ故に惑いと疑いを生じるのですから、その疑いをさしはさむ余地なき状態として信の字を当てたのは適当でしょう。ですから信はまず真実との一致を本来の義とするものと言わねばなりません。世上一般に無条件に鵜呑みにすることとか、主観的に盲従することを信心と思ひなしているのは大きな誤解といわねばなりません。信心とは人間の相対的なはからいが破られ、絶対的な真実、南無阿弥陀仏に値遇して、煩惱具足の身が勿体なくもその真実に摂め取られる事実としての境地に外なりません。それを今「信心治定の人」ともうされています。

二

信は私のものであつて私のものではありません。足利浄円先生がよく「私は空っぽです」と申されました。『歎異抄』に「ただほればれと弥陀の御恩の深重なること常におもひ出しまいらすべし」と。まことにこの濁水の胸に來り宿り輝いて下さる本願の御心をただほればれと仰ぎまいら

するばかりです。だからわが心に保持したり握ったりするものは何もありません。今まで頼りにしていた我が心の計いを散じますから空っぽです。その空っぽの腹中を無量寿無量光の風が絶間なく吹き通つて下さる。「我が肚裏は五月の鯉の吹きながし」と言つた方がありますが、私には有難い言葉です。

勿論、人生の業風も吹き込みます。しかしその業風が光寿無量の清風に融かされ流されて、吹き通しの鯉の尻尾から抜け出てゆきます。業風を避けることはできませんが、出口を閉じてためるのは愚な事です。白井成允先生の詩の一節に、

業風吹いて止まざれども　ただ聞く弥陀招喚の声
声は西方より來りて　身をめぐり髓にとほる
慶しいかな

身は娑婆にありつつも　現に浄土の光耀を蒙る
と詠じておられるのも、こうした奇しきよろこびの御心でしょう。

この汚濁の胸を洗除して下さるのは、仏徳の独り働きです。それが信樂の賜物であります。これを頂戴する人の心情は、ただ慚愧と歡喜の二語に尽きます。如来の徳は真理の力です。その真実の仏徳が執我の垢を流して輝くところに、言葉では言い尽くせない奇しき清々しさが人格に滲み

光る。それを私は恩師の上に親しく拝みました。本条に「先づ見れば、すなはちたふとくなり候」とはこの消息を語る言葉でありましょう。

三

「是れ其の人のたふときに非ず、仏智を得らるるが故なれば……」親鸞聖人は真仏弟子の釈（信巻末）に「触光柔軟の徳を誓われた第三十三の願を引用しておられます。ここに誓われている身心柔軟こそ念仏者の賜わる徳ではありませんか。身心柔軟とは、この惑える命の根となつていた執我が仏智の光明によつて融かされることです。不思議にも煩惱具足のこの身に柔軟心の風が吹き込んで下さる。念仏申させていただくとき、今までのこだわりが何処かへ吸い取られて心の軽さを覚えるよろこびを知らせていただく。これはなにもものにも代えがたい賜物です。

しかも同時に聖人が信巻末の冒頭に、金剛の真心の人は「横に五趣八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲る」と断言しておられるのに言い尽し難い感激を覚えざるを得ません。至徳具足の益、転悪成善の益、心光常護の益、心多歡喜の益、常行大悲の益、知恩報徳の益、等々何という広大な恩徳でありましょう。かかる如来の行徳が今この身の内に胎動しておられるのです。信にはそのまま如来の行が含まれているのです。

秀存師語録

浄土真宗に信あつて行がないとは勿体ない誤りです。行をして如実の行たらしめるものは唯だ信であります。無量の行徳がこの私を待ちかまえておられます。聞法とはただ坐して聞くことではありません。如来より賜わる信行一体の道を辿り進むことです。現生十種の仏の行徳をいただくとすれば、それこそ日もお足らず、為すべきことは無限です。しかも信の上に顕現する仏徳を頂戴することは、通途の行の努力とは異なり、はげみがそのままよこびです。ここにこそ仏道の行があるのではありませんか。

道元禪師が修正（弁道話）ということを言われていますが、これは修を証の手段とする対立觀念に陥つては仏道を成じ得ないことを戒めて、真実の修の所在を示された言葉です。「証上の修に引転せらる」と語られているのも同様です。信心の上にたまわる現生十種の仏徳を尊び敬い頂戴する。ここに法爾として仏道を実践させていただく真実の道が自然と開かれるのは、何という広大な恩徳でありましょう。それは全く仏智によつて然らしめられるところですから、されば「弥陀仏智の有難きほどを存すべきなり」と結ばれております。

（昭和五四・十・十日）

自照日誌抄（14）

——再びは通らぬ——

ことしも亦、わが裏庭に萩の花こぼれ、そして片隅に真赤な彼岸花が葎たかく一輪さきました。このころになると私、茂吉の左の歌を念う。

あかあかと一本の道とほりたり たまきはるわが命なりけり

○ この夏の終り、木曾川のほとりの犬山ホテルで、神戸一中時代の同期同窓の会があつて一泊。約三十名の若い七十翁が集つて少年の日に帰えり、それは楽しいことでありました。

この中に、大分の国立中津病院長の医博・平田覚君もいました。その平田君、宴会では偶々隣席でありましたが、同君曰く、医者をしていて、つくづく感ずることだが、ともかく真宗の門徒の爺さん婆さんの死にざまには、まったく頭がさがる、たいしたもん、と。わたくし、ありがたく肯きながら、中津は臼杵祖山師、それに東陽円成和上のご

○ 云く。善きも悪しきも我がためとなれば、外へはやらぬなり。信を得たる人は、人の善きもわがためなり。人の悪しきもわがためなり。みな我方へこけこみて、喜びの縁となり、或は我への意見となると。

宿かさぬうらみも晴れて野辺の月

○ 昔は山寺が羨しかったり、鼠衣が恋しかったり、喜び心がほしかったが、そんな心が続いたら、続く心をたのみにしてまた迷うていたに、今はたのみにする程の心が無い故に、お慈悲一つがたのまれるようになった。

○ 一蓮院様、江戸におこしの折、詰所にて四人ばかりの同行への御文談に、唯如来様のおちからばかりとおきかせになり、その帰館の途すがら、信次郎に仰せられけるよう。

「信次郎、今晚の四人の同行は、何処の誰々というよりぬきの同行ばかりだったが、よりぬきの同行ばかりにならずに、如来様の御力ばかりの同行になりし者がすくない」
とおなげきありしと云々。

西元宗助

教化の故地であることをひそかに憶い、両師をお偲びしたことである。

○ なお平田君は、かの有名な南天棒門下の逸材・飯田といふ人居士の令息であられることを、このとき知って、なるほどとそのお人柄に感じいったことがありました。

○ ある友人と話をしている、いつのまにか、ある人の噂話となっていました。そして、ああだ、こうだといったあげく、例によつて結局、二人して、けなしているのでありました。

それで私、いやア、人の悪口をいつているこちらのほうが、よっぽど悪い、と苦笑。じつさい、得たり顔して喋べっている我らのほうが、はるかに悪い、罪も深い。しかもその罪の深い仲間に、友人をひきずりこんだ私の罪は一層深い。

○ ○ 大阪大学名誉教授の田花為雄氏から「言詠観帖」と題する高著をいただく。その中に、ある老大工の言として、家を建てる場合、隅から隅まで完全に仕上げないで、どこか一か所だけは故意に仕上げずにおくのが慣らわしと。そのため床間の欄間の裏側を荒壁のままに捨ておくのが普通で、これはかの易が、既済（完全）に終らずに未済（不完全）を至極とするのと同じの哲理によるかと、著者がいたく感歎していられるのを読んで、わたしは亦別の意味からも肅然としました。そして痛く恥じ入ったことであります。

それはあるとき、新築の屋敷で、たまたま立派な床間のらんまの裏側をかいま見たところ、なんと荒壁のままであるので、大工さん、人目につかぬところを手抜きしたのかと、得たり顔して慨歎したことがありますから、ほんに申訳のないことであります。

○ ○ しずかに、寂かに、ことしの秋もすぎていく。榎本榮一さんからいただいた一連の詩のうち、なんと口ずさんでも身に沁みるのを、例によって紹介し、拙稿を飾らせていただく。

再びは通らぬ

念 仏 詩 抄

かかりづめ

香師おおせに
ウタガイのはれぬが
凡夫の自性——
はれぬウタガイ
はらしてくださるが
如来のお慈悲——

如来はかかりづめ
かかりづめ
ウタガイはれさすに
かかりづめ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

香師——香樹院徳龍師

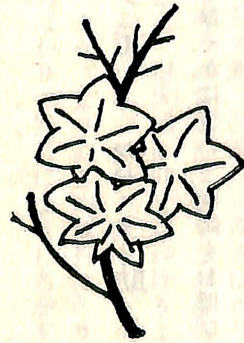
一度きりの
尊き道を
いまあるいている

ふり返れば
えんえんと幾山河
いまは ただかたじけなく

やはり死ぬのは
私がさきで

家内はあとが都合よろしく候

昭和三〇年九月三〇日校了



木 村 無 相

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

如来大悲の恩徳は

香師おおせに
拝まれたもうは
大悲の如来——
拝むころは
大悲のお興え——

如来大悲の恩徳は
拝むころと
なつてくだされ
若生者と
ちかわせたもう

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ただし

香師おおせに

“聴聞は

娑婆逗留（とうりゆう）の
手提灯（てじょうちん）

——”

ちようちん忘れちゃ

足もとまっくら

臨終一念の夕べまで

聴聞 聴聞

ひとえに聴聞

ただし

聞こえたには

用がない

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

乞食（こじき）どころか

香師おおせに

“三悪道をはなれた

喜びを知りてみれば

たとい乞食をしても

不足はいわれぬ身なり”

乞食どころか

ブチ殺されても

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

お助けはただ

香師おおせに

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

念仏の申されぬは

香師おおせに

“念仏の申されぬは

後生が大事でないか

信のなきシルシ——”

聖人おおせに

“真実の信心は

必ず名号を具す

名号は必ずしも

願力の信心を具せざる

なり——”

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

“みなが思っている信心と

このたび仏になる往生の

信心とは

カタチで言うならば

ケシ粒（つぶ）と

富士山ほどのちがいなり”

ケシつぶ信心なになる

“ただ念仏して弥陀に

助けられまいらすべし

お助けはただ弥陀——”

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ



遠く宿縁を慶ぶ

花田正夫

薄明かりでは見えなかった部屋の塵埃も、強い太陽の直射をうけるとはつきりと見出すことが出来る。私自身、仏の慈光に浴して、段々と自己の姿が見えはじめ、七十六才近くなった。そこに、智^{さぎ}目なく、行足のない身がいよいよ事毎に知らされるにつけ、こうした身が真実な教えにおおい出来たには、前に後に、手を執り、後押して貰った深く遠い御縁が思い出されるのであります。

しかも、御縁は私が求めて与えられたのではなく、求めることも知らない私に、恵まれたものばかりであります。

ことに身近かな人々によるそだてというものは、非常にあり難いものであります。

私の祖父は、口にかけて仏法を話してくれたことはありませんでしたが、寺の総代などをしていましたので、何処かで聞いた片言隻句、和歌などを、紙切れに書きつけ襖などの破れに張りつけておりました。それを自由に読んで自然に覚えたものに、

世をいとい人山に入り山にても猶うきときはいずち行くらん

闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば生まれぬさきの父ぞ恋いしき

さとりとはさとらぬまへのさとりにてさとりというも
等がりました。これらは私の心にのこり、禪家の云う
考案のように、そのこたえを無言の中に求められました。

次に私の祖父は、いつも私を見護ってくれ、また身をもつて、教えを示してくれました。祖父は私の父と共に庶子として生まれ、世間の冷たい風に苦しんでいましたが、母の願いのままに医学を学び、開業しました。貧乏してしましたのでやっと二階借りしておりましたので、患者が一向に少なく、聴心器と常備薬を持って、貧しい人の住む街を歩いて、病人を診ておりました。そうした経験から、私に

「貧しい人を軽視してはならない。わしの開業の始めに無料で治療した人達が、終生患者を紹介してくれたので、やっと立ちあがれた」と語ってくれました。

其後、結婚もし、子供も出来たのですが、その一人が夭折したことがきっかけになり、この子一人を育てあげる力があればどれだけの人の子を世話出来るだろうかと思つて孤児院にも関係して、縁ある者を学校にも入れておりました。ところが、伯母はこれを心よく思わず、二人も実子が居るのに、借金までして人様の子を世話しなくてもよいにと反対しておりました。このことが祖父の問題となり、色々と煩悶しました。丁度私が中学生の頃、正月を祖父の家ですごしました。忘れもしません、元旦を迎え、早朝に起きますと、伯母が「あなたは伯父さんに可愛がられているから、寺に行つて迎えて帰っておくれ」と頼みますので、早速伯父と一緒に帰り、みんなで雑煮の席についた時、伯父はフト立ちあがつて、仏壇の前に坐り、涙を流して念仏しておりました。やがてものと座につくと、伯母に向つて、「わしは無理ばかりあなたに求めていた。あなたは何不自由のない家庭に育つて順調な生活をしていたが、わしは、幼い時から人に云えぬ苦勞をした。そのせいで親のない子を見るとほつておけない。そしてあなたにも同様になれと求めていたのは無理であつた。すまなんだなあ！」と両手

をついてあやまつておりました。

それからの祖父は一段と朗らかになり、やがて、薬代の払えぬ人々のために寺を借りて、施薬院を開き、お錢は賽銭箱に自由に入れなさいと云つていました。又、或寺の賓頭盧尊者（仏弟子・十六羅漢の一人）を拜むと眼の病が治るといつて、自分の悪いところをさすつては、尊者をさするといつた風な現世利益的迷信がさかんと聞き、これでは悪い病が伝染するからと、住職を説いて、金網でかこい、これではお参りの人が物足らぬから、診察して眼薬をあげよう、御礼は仏様にして下さい、と云つて終生、週に数回午后は慢性の眼病の治療をし、悲眼院と名づけていました。自宅診療をすまずと、施薬院、悲眼院通いで、忙しい生活をしました。休暇になると祖父の家に行きますと、それとなしに、仏道を身近かなことで教えてくれました。

私の中学に入った頃の夏、海水浴をかねて祖父の家に行くと、西瓜を御馳走してくれ、私と同年輩な者を集めて、「お前達は地球を動かす方法を知っているか？」と質問しました。あまり突拍子なのでみんなが黙っていると「地球上におつては地球は動かされぬ、地球外のところから綱をつけて引張るのだ」と笑いながら答えてくれました。

又、或時、坐布団の上に坐らせ、「自分の力で坐布団と一緒に上げて御覧！」と云い、どうしてもあがらぬのを見

て、「力の強い横綱だって出来ないよ。自分で自分の始末はむつかしいものだなあ」となかば独り言をしていました。以上により、自分の力の限界と、他力によらねばならぬことを暗示してくれました。

又岡山の高等学校に入った頃、難波大助の大逆事件が報道され、大助の父はそれを苦にして自殺したと続いてやかましく報道されました時、伯父は私を呼んで「コップを出し、これに毒薬を入れて飲むと死なねばならぬけど、このコップにある毒薬も、海に流すと毒性を失ってしまう。大助の父はこの毒を自分で飲んだのだ。わしは、毒の消える大きな海を知っている」と云ってニッコリ笑っておりました。

又、有島武郎が某夫人と心中したことが大きく報道された時でした。伯父は、有島が倅引きだったら自殺せんでもすんだらうに、とひとこと云いました。

更に、例の東京の大震災の時、貧しい人々はさぞこまっているでしょうと伯父に云うと、「一番こまっているのは上流階級で、平素人手ばかりを借りていたから難儀しとるだろう」と、私の軽薄な観点をただしてくれ、自分の考えはよく反省せねばとんでもないあやまりをするぞと知らされたことです。

てのない仏様だな」とありがたく思います」と告げますと、「お前は六高のドイツ語の池山先生を知っているだろう。あの先生は日本でもまれなこの本の体読者だから、よく先生から聞け」とのことでした。

私は、六高の理科乙類で、ドイツ語を毎日教えてもらっていました。然し、灯台もと暗しと申しますか、猫に小判と申しますか、先生が深い仏法の体験者とは知りませんでした。そこで早速先生の家をお訪ねして、教えを聞き始めますと、伯父は、菓子箱を持って、十里もはなれたところからわざわざ先生をおたずねして、くれぐれも私のことを頼んでくれました。そして、心のふるさとの家に一歩近づいた、もう安心だという様な様子が伯父に見えました。

しかし、六高を卒えませぬうちに、伯父は急に亡くなりました。我の強い、わがまま者の私を、手綱をながくして、見えつ、かくれつ、じつと見護ってくれ、歎異抄を渡し、池山先生に手渡ししてくれ、間もなく亡くなったのでした。「俺が死んだら、火葬にして、お骨をすてると罪になるから、箱に入れて海へ投げこんでくれよ」とよく云っており、遺族の者達の希望で、それでも墓地におさめましたが、伯父の心中には、聖人の仰せ「加茂川に投げこんで魚の餌食にせよ」を心に刻んでいたのでしょう。

さて、私は、自分の帰るべき心のふるさとは見えました

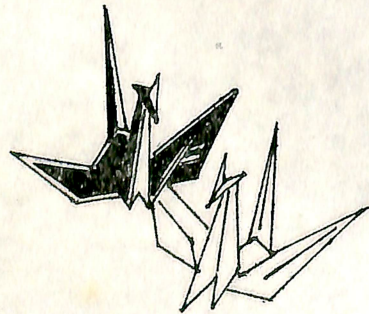
のちに私自身が、熱心に教えを求めはじめ、教会にも通い、一灯園にも訪れた頃、伯父は「誤聞かさずに教を実行せよ。もし行き詰ったら打ち明けてくれ。お前は一方向きだから行き詰っても無理に進むようなことがないように」と言ってくれました。

はたして、どの教えも真面目に実行しようとしても出来ず、あれか、これかと、自分の道を求め、それが見出されないで闇の砂漠を彷徨するような生活におちて、その苦衷を伯父に打ち明けました。伯父はじつと聞いていて、早速歎異抄をくれ、これをよく読めと、勧めてくれました。伯父の何時もと違った確信ある態度にうながされて、二階の一室にこもって、読みはじめました。然し聴聞を一度もしたこともなく、仏書を読んだことのない私には、ほとんど解らぬところばかりでしたが、「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」とか「悪をもおそれなし」とか。又聖人御自身が「いずれの行もおよび難き身なれば地獄は一定すみかぞかし」とか「煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなれることあるべからざるをわれみたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のため云々」等々は、今までに聞いたことのないことばかりで、強く心をうちました。

早速伯父に、「こんな本は今迄読んだことはありませんでした。これなら私のように、愚かで、愛のない者もおへだ

ものの、仲々その教えは日常生活の力にならないで、信仰と生活が離れていることを歎いていましたが、岡山医大の三回生の秋、はじめて教えが身にしみ、お念仏も申せる身にさせて頂きました時、父の墓に御礼まいりをいたしました。その途々で、伯父が生きていたら、心から喜んでくれるのになあ」と、あらためて御恩を仰ぎ、お念仏裡に伯父とうなずき合いました。

遠い宿縁を憶うにつけ、今回は伯父の存在を記し、亡くなって六十余年の思出を述べました。私事に終り恐縮ですが、御判読下さいますように。誌友の皆様もきっと御身辺によき人々をお持ちのことと信じ、思い出していただきたいとお願い申します。



あとがき

秋風に紅葉も散つて裸木が秋陽を全身に浴びている景色がありありと眼に映るのが、金風体露という一句で、晩秋になると思い出して口に誦しております。信の上からは、定散の飾りが払われた、念仏の産声とも味わえますことです。

○

本月号は、近角先生、福島先生、そして安波医師の浄土の味について、白色白光、赤色赤光、青色青光と夫々の法味を頂きました。死を忘れて、生のみにつける私共でありましたが、それだからこそ浄土の教えを耳から目から心に容れておきたいものであります。

井上様の稿を筆写して、ほととぎす、聞くやころをからにして、と云った古句を連想し、そここそ妙音がひびくことでありましょう。とうなずきました。

西元様の「再び通らぬ」の副題は、襟を思わずたされました。ひとにも、ところにも、一期一会。そこに随時、随所に尊い教えが、美しい声がみちていると申せましょう。今日も秋晴れの道を歩みながら「一人即一切人、一切人即一人」とくりかえしつつぶやき、改めて親鸞聖人が、一切人の業報の中に御自身を見出され、また聖人お一人の中に一切人がおさめられている尊容を

拝し、お念仏させていただきました。

木村さんは、近く、太子園の隣りの、和上苑に移られる由、太子園では一番弱い園生、寝にきりの人ばかりの和上苑では、一番丈夫な苑生とのこと。「落ち栗の座をさだむるや窪だまり」と、乞食俳人、井月さんの句を思い出し、木村さんに送りました。やがて来る北陸の冬、ただに無事なれと念じております。

国木田独歩（明治文壇の人）の臨終に、植村牧師が見舞い「天国は近づいた、さあ祈ろう」と声をかけた時、「祈りの言葉をくりかえすことは簡単であるが、本当の祈りが出来ない。この祈り得ない者を救う宗教はないのか」と号泣して、そのまま息が絶えた、とある。彼は人間の極限に立っている、所謂機が熟していたが、法にあえなかつたのである。見下げはてることが人間最大の経験といったニイチエも、その暗闇の中に生を終えている。法を聞いていても機が熟さないと、徹底しないが、機が熟していても法にあえないと空しく終る。いたましい限りである。両々あいまたねばならぬが、平生に大切なことは、よき人にそだてられ、よき教えの種が心田に蒔かれることとであります。みのりの秋を迎え報恩講があらちこちらに催される日本は、恵まれた国と云えます。

△御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、南区駆上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り。又は北山下車。地下鉄、御器所通り下車。

定価 半年 七〇〇円（送共）
一年 一四〇〇円（送共）

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駆上町二ノ八八

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 坂部 光雄
名古屋市南区駆上町二ノ八八

発行所 慈光社
振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七